

左京二条二坊十五坪の調査

―第514次

1 はじめに

平城京左京二条二坊十五坪は、法華寺阿弥陀浄土院が所在する十坪の東隣にあたる。十五坪は、阿弥陀浄土院の前身西南角院に対し、東南角院といえる位置にあり、法華寺そして藤原不比等邸の一郭であった可能性が考えられてきた。第281次調査では、十坪と十五坪の間の東二坊坊間東小路の位置で、二条条間路に向かって開く門SB7110を検出しており(図Ⅲ-48)、位置的にみて法華寺全体の南門の可能性が考えられることから、十五坪が法華寺域である可能性がより高くなってきている。

しかし、これまでの十五坪の調査は概して小規模なものが多く、坪の東辺でおこなった第357次調査で64点の施釉瓦が出土したのが特筆される程度であった。当該地については昨年度、宅地造成に先行して道路部分の発掘調査(第501次)をおこない、今後は個人住宅の建設に先立ち、学術調査として宅地部分の発掘調査をおこなった。

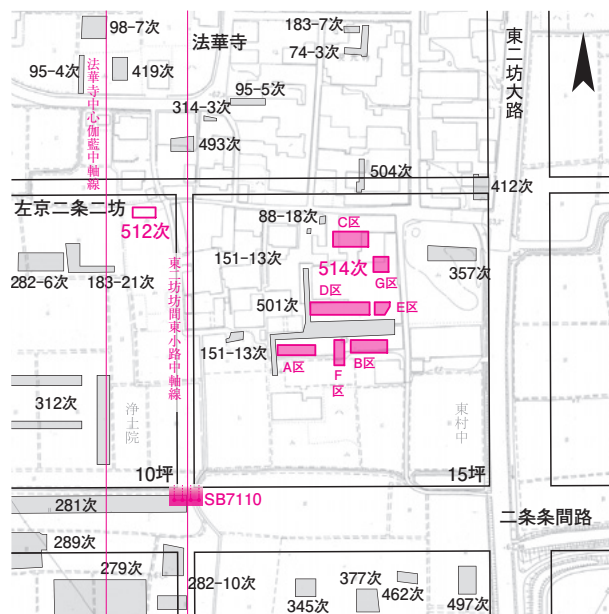
2 基本層序と遺構

調査区はA～G区の7カ所に設定した(図Ⅲ-48・49)。基本層序は、上から昨年の造成による盛土が1mほどあり、その下に旧染織工場の造成土が30cm程度、耕土・床土、さらに部分的に遺物包含層や整地土を挟んで、地山(黄灰粘土、北側で礫混じり橙色土や明白シルト～粗砂)となる。北方のC区では地山がやや複雑な様相を呈し、西側では黄灰色粘土、東側で礫混じり橙色土や明白シルト～粗砂が混在する。

遺構検出面は南北で比高差が大きく、南側で40～60cm低い。そのため、北側のC区で検出した掘立柱穴は1.3m程度が残存しているのに対し、南側のD区では15～20cm程度しか残っておらず、削平を受けている。

奈良時代の遺構

数棟の掘立柱建物や堀を検出し、もっとも遺構が密なF区の状況からみて、少なくとも奈良時代において3期の変遷は想定できる。しかし、いずれの建物も部分的な検出にとどまり、第501次調査の成果とあわせても、坪内の全体的な配置等は不明と言わざるを得ない。



図Ⅲ-48 第514次調査区位置図 1:3000

掘立柱堀SA10385 B区の東よりで検出した東西堀。さらに東に伸びる可能性がある。

掘立柱建物SB10386 B区の西寄り掘立柱の柱穴を2基検出した。南側の排水溝では確認できず、東西堀の可能性もあるが、D区で柱筋を同じくする位置に柱穴1基を検出しているため、南北5間以上、東西2間以上と推定される。SB10387と重複し、これより新しい。

掘立柱堀SA10387 B区とF区にまたがる。

土坑SK10388 F区の西南で検出した。土器少量と瓦を多く含む。三彩瓦を多く含む、土器には暗文を施す土師器杯Aや黒漆を塗った須恵器鉢Aなどがみつかった。

掘立柱建物SB10389 SK10388と重複して、これより新しい。F区で2基の柱穴を検出したが詳細は不明。

掘立柱建物SB10390 F区で検出した。土坑SK10388と重複し、これより古い。西南に展開する建物であろう。

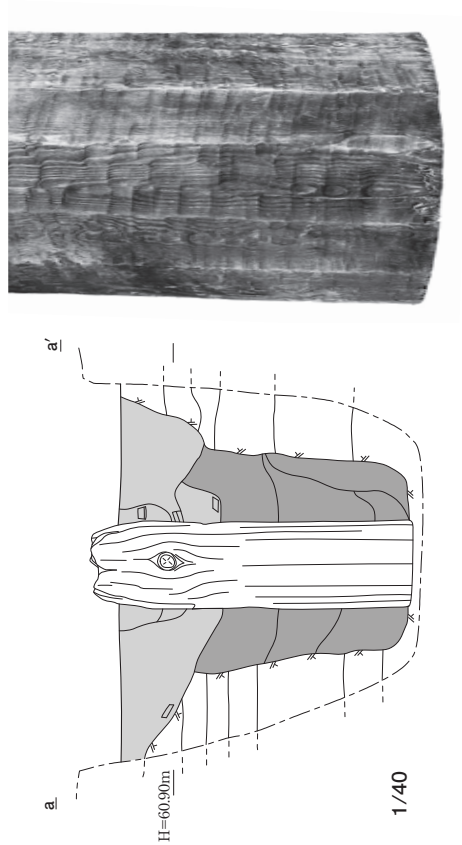
掘立柱堀SA10391 F区中央付近の東西堀。南北に組合う柱穴がないため、東西に伸びる掘立柱堀であろう。

掘立柱堀SA10392 D区と第501次調査区にまたがる南北堀。坪の推定東西心からは、約2m西に位置する。

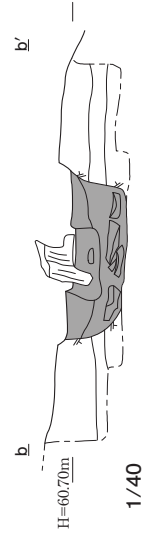
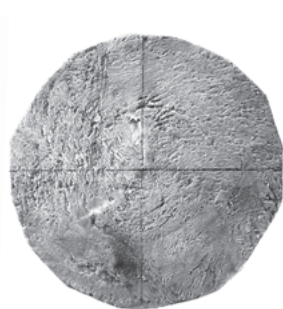
掘立柱建物SB10393 長さ約30cm程度に切った薄い板材を礎盤とする掘立柱で、柱根が2基残っていたが、いずれも高さ約15～20cmしか残存しない。第501次調査でも同様の工法の柱跡を検出しており、柱筋も合うことから同一の建物であろう。D区の南端でも柱穴をみつかり、総柱の建物と考えられる。柱穴掘方から小片ながら暗文を施す土師器皿が出土した。

掘立柱建物SB10394 G区の南寄り掘立柱で2基検出した。北側には展開せず、南に展開する建物の可能性がある。

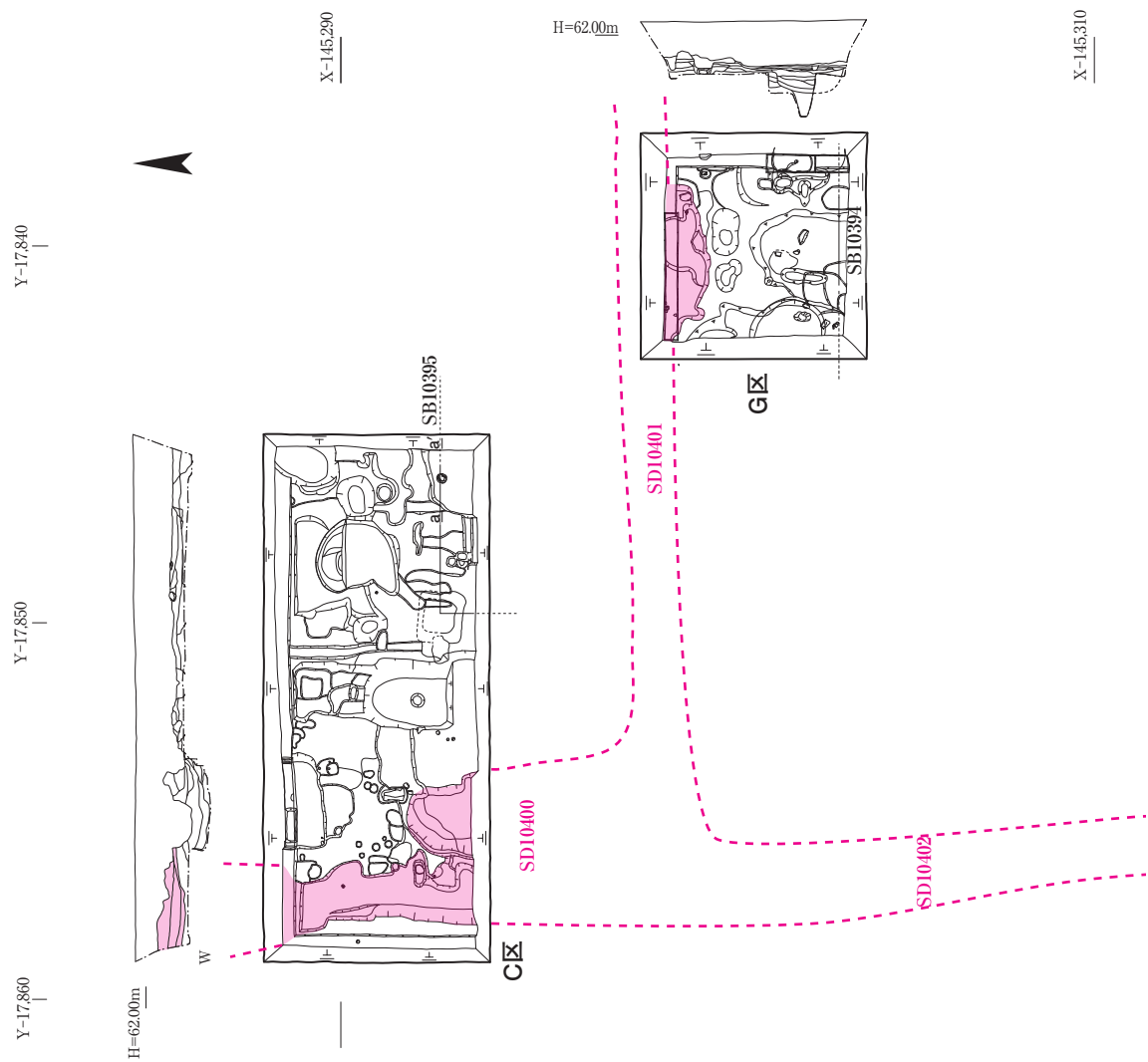
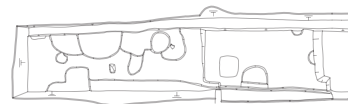
掘立柱建物SB10395 北側のC区の南東寄りでみつかった。西側の柱は抜き取られていたが、東側は残存し



C区 SB10395柱穴断面图



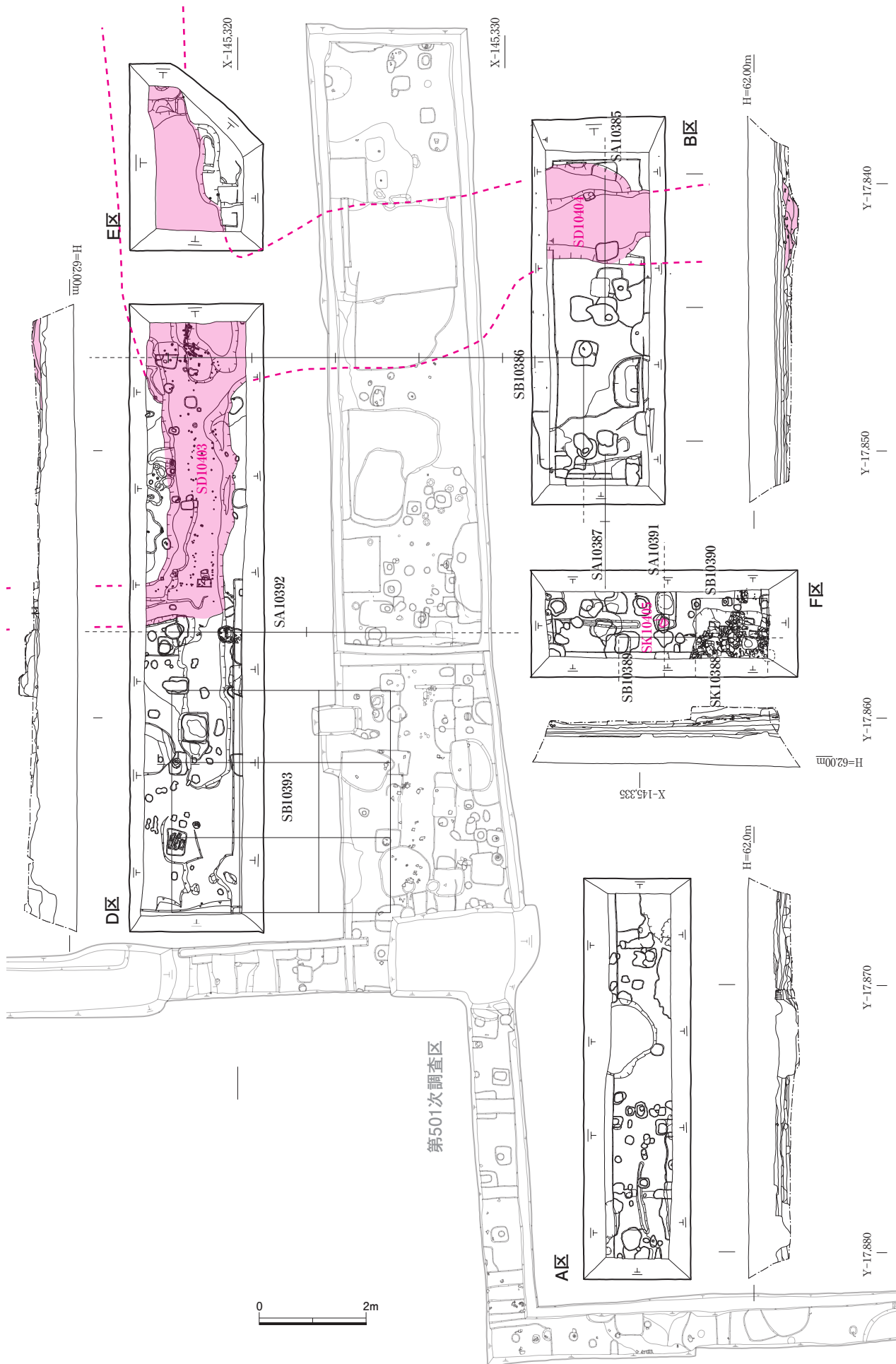
D区 SB10393柱穴断面图



X-145,290

H=62.00m

X-145,310



図Ⅲ-49 第514次調査区遺構平面図・土層断面図 1 : 100

ていた。後述するが、柱の規模は大きく、比較的大規模な建物の一部と推定できる。

中世後期の遺構

主に調査区の東側を中心に、縦横に流れる溝を検出した。埋土からは室町時代の赤土器・白土器をはじめ、土釜、箸、下駄、曲物、漆器や鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土した。

南北溝SD10400 C区の西端を南へ流れる。

東西溝SD10401 G区の北側を東西方向に流れる。東から西へ流れ、南北溝SD10400と合流するのであろう。

南北溝SD10402 南北溝SD10400、東西溝SD10401が合流してD区に流れ込むとみられる。

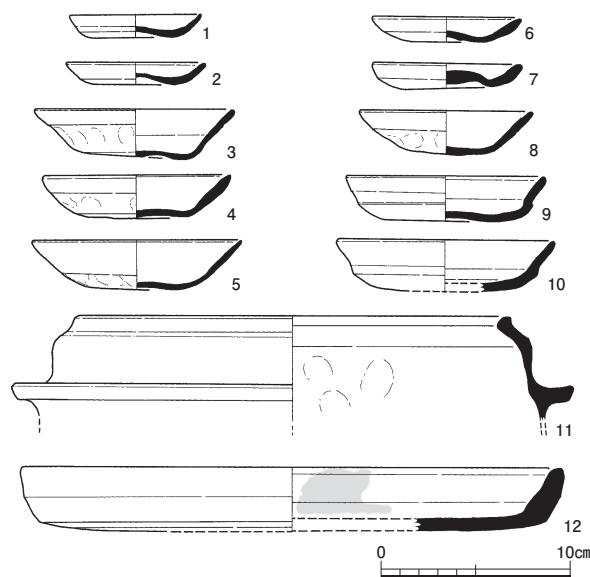
東西溝SD10403 南北溝SD10402が直角に東に向きを変え、SD10403になる。E区に続き、さらに東に延びる可能性がある。SD10402とSD10403の接続部分には、兩岸に小規模な掘立柱を2本検出した。簡便な作りの橋脚であろう。D区の東端で、南に伸びる南北溝SD10404に合流するが、分岐点がもっとも深く、十数本の杭を打ったしがらみを検出した（巻頭カラー図版8左下の手前部分）。

南北溝SD10404 東西溝SD10403から南に流れる溝。第501次調査で検出した土坑SK10325・SK10326もSD10404の一部であろう。B区でとくに鉄滓など鍛冶関連遺物が多く出土した。

土坑SK10405 埋土から14世紀頃の大和H型の土釜の上半と石や鉄滓が出土した。

3 遺 物

土 器 古代のものとしては、土師器、須恵器のほか、奈良三彩、緑釉などが出土した。土師器の供膳具は、いずれも小片であるが、暗文をもつものが多い。須恵器の中では漆付着土器や左上がりの放射状暗文をもつ杯Aなどがある。また、奈良三彩陶器が12点、緑釉の香炉片が2点出土した。もっとも多いのは室町時代のもので、溝SD10400～SD10404を中心に出土した。埋土は1～5層に分けて取り上げた。土器の内容は漸移的に変化するものの、14世紀後半から15世紀中頃の年代幅に収まる。青磁など陶磁器や土釜、瓦質土器を含むが、ここでは土師器皿を中心に報告する。土師器皿には赤土器と白土器があり、赤土器の胎土はやや暗赤茶色に近い。図Ⅲ-50、1～3は1層出土の赤土器。4・5は2層出土で、4は



図Ⅲ-50 第514次調査出土土器 1：4

赤土器、5は白土器。8は3層出土の白土器。6・7・9は4層出土の赤土器。10も赤土器で5層出土。3・4が明確に口縁端部を折り曲げるのに対し、9・10は口縁端部を強くヨコナデし、やや古い様相を残す。11は大和H型の土釜。12は粗い胎土で、火を受けた痕跡が残り、火鉢か火容れであろう¹⁾。

(神野 恵)

瓦磚類 出土瓦磚類は表Ⅲ-5のとおりである。軒瓦では奈良時代と中世のものが多い。三彩には、軒平瓦6667D3点、型式不明の軒平瓦7点、面土瓦1点、鬼瓦1点、多数の丸瓦・平瓦があり、F区を中心に多く出土した（巻頭カラー図版8右下）。鬼瓦は南都七大寺V式の小型品である。また、土坑SK10388からは奈良時代の完形の平瓦が多数出土した。ここでは奈良時代の軒瓦と中世の軒瓦を中心に報告する。

図Ⅲ-51、1～10は奈良時代の軒瓦。1は6138BでE区の東西溝SD10403出土。2は6282A。3は6285A。どちらもF区の土坑SK10388出土。6285Aは平城瓦編年のⅡ-1期で、同じくSK10388出土の6の6667Aとともに光明子邸所用とされる。4は6320AでD区包含層出土。5は6664CでB区の土坑SK10396出土。7は6691Aで皇后宮所用とされる。D区の掘立柱塀SA10392出土。8は6713AでB区の土坑SK10396出土。9は6768AでD区の包含層出土。10は6768BでC区の土坑SK10397出土。

11～24は中世の軒瓦。11は鎌倉時代のもので「法」の古体字を配する。B区の包含層出土。薬師寺や海龍王寺に同范例がある。12～15は巴文軒丸瓦。巴頭が互いに接するまたは尖り気味の12・13がやや古く、巴頭が丸みをもつ14・15がやや新しいか。12はD区の包含層、13はB区の包含層、14・15はD区の南北溝SD10404出土。16～



図Ⅲ-51 第514次調査出土瓦磚類 1 : 4

19は鎌倉時代の軒平瓦。16・17の接点は無いが同範品とみられ、類例が興福寺、当麻寺などにある。17はB区のSD10404出土。18はD区の包含層出土で、興福寺食堂出土例と同範か。19はD区の掘立柱塼SA10392と重複する穴から出土し、類例が海龍王寺、秋篠寺にある。20～24は室町時代の軒平瓦。20はB区のSD10404出土で、西大寺に類例がある。21はB区の包含層、22はC区の南北溝SD10400に壊される穴から出土したもので、海龍王寺や不退寺に類例がある。(川畑 純)

木 器 室町時代後期の東西溝SD10403から、漆器椀2、漆器皿2、下駄1、曲物側板2、箸9、板14、板

材20、加工棒3、東西溝SD10401から、加工板14、板23、箸35、加工棒3が出土した。この他、暗灰土から、漆器椀1、曲物底板1、加工棒1がそれぞれ出土した。SD10403、SD10401から出土した箸は45点あり、完形品も15本を数える(図Ⅲ-52上)。これらの長さは、23cm、20cm、17cm前後の3つに区分できる。いずれも厚さは0.6cm前後で、断面形は多角形から円形である。中央部の径が最大となり、両端に向かって細くなるように加工されている。上下端の加工の程度や径は同じであり、両者の区別はないようである。一部に加工痕が認められないものもあり、未製品と考えられる。中世の鎌倉などでも、大量のかわらけと共に箸が使い捨てられる事例が報告さ

表Ⅲ-5 第514次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6131	A	1	6572	C	1	丸瓦(三彩)	6	
6134	C	1	6663	E	1	平瓦(三彩)	46	
6138	B	2	6664	C	16	(ヘラ書)	1	
6282	A	1		M	1	(刻印)	1	
6284	A	1	6667	A	8	隅切平瓦	2	
6285	A	4		D	4	面戸瓦	6	
6301	B	2	6691	A	7	(三彩)	1	
6320	A	1	6713	A	2	熨斗瓦	2	
型式不明(奈良)	10		6714	A	3	鬼瓦(三彩)	1	
古代	1		6721	C	2	鬼瓦(近世)	1	
中世	8		6767	A	4	伏間瓦	1	
近世	2		6768	A	1	雁振瓦	6	
時代不明	2			B	4	隅木蓋	3	
			型式不明(奈良)	6		用途不明道具瓦	4	
			(三彩)	7		土管	1	
			古代	3		レンガ	1	
			中世	11				
			時代不明	1				
軒丸瓦計		36	軒平瓦計		82	その他計		83
丸瓦			平瓦			磚		凝灰岩
重量	232.792kg		重量	864.968kg		重量	22.563kg	
点数	1730		点数	6335		点数	19	
							1	

れており²⁾、南都における事例として興味深い。漆器では、椀は破片ながら高台の付くものがあり、皿は口径9.0cmで器高0.7cmの挽物で、中央部に赤漆で草花の文様が描かれる(図Ⅲ-52左下)。下駄は、長軸両端が欠損するが、連歯下駄で残存長21.1cm、幅11cm、高さ3cm。このほか多数出土した板は、厚さ0.5cm以下のものが多いが性格は不明である。暗灰土出土の曲物底板は、直径11.8cm、厚さ0.5cm、木釘の痕跡が残る(図Ⅲ-52右下)。

冶金関連遺物 羽口が調査区の各所から出土した。ほとんどが小片だが、土坑SX10405では先端が残る直筒のものがあり、外径5.8cm、孔径2.8cm。南北溝SD10404からは黒褐色、灰褐色、褐色椀形鉄滓が10個体以上のほか、焼土粒が出土した。椀形鉄滓は、完形のもので径8～10cm、厚み2～3cm程度で、重さは250～450g程度の沸かし鍛練鍛冶滓。(芝康次郎)

木簡 G区の東西溝SD10401から1点出土している。表裏に墨痕があるが、判読できない。(渡辺晃宏)

柱根 C区SB10395柱穴から、径約35cm、残存長1.3mの芯持ちの柱根が出土した。下方ほどチョウナ痕が明瞭に確認でき、底面には十字に引かれた墨線やぶんまわし針穴が明瞭に残る。樹種はコウヤマキ³⁾。(松下迪生)

4 まとめ

奈良時代の遺構は部分的な検出にとどまったものの、残存する柱材の大きさは平城宮内のものに匹敵し、建物規模の大きさをうかがわせる。初例ともなる三彩鬼瓦をはじめ、この坪内での三彩瓦の出土は平城宮内においても見出しがたいほどである。出土した土師器に暗文を施すものが目立つ点などから、おもに奈良時代前半に大規模な建物群が展開していたことが想定される。阿弥陀浄土院や法華寺の位置関係からみて、十五坪が法華寺、あ



図Ⅲ-52 第514次調査出土木製品

るいはその前身の藤原不比等邸と一連の占地であったことを裏付けるものといえよう。

また、今次調査であきらかとなった室町時代後半の溝は、狭い範囲を縦横に巡らされていた。出土した遺物は多様で、周辺に集落が形成されていた可能性を示唆する。大和における中世の環濠集落は187カ所に及ぶとされ⁴⁾、成立時期は南北朝以後の動乱期と推定されている⁵⁾。こういった環濠集落には「垣内」などの字名を残すことが多いことも指摘されている⁶⁾。調査区周辺の小字名をみると、当該地より北の法華寺寄りで寺垣内や城ノ内、南西の平城宮東院寄りでは宮垣内など、「垣」や「城」を残す小字が目立つ点は興味深い。

絵図として残るものは、法華寺が所蔵する江戸時代中頃のもの唯一例で⁷⁾、南側に東西方向の大濠が描かれており、当該地には人名が記され、すでに宅地となっていることがわかる。今回の調査は、中近世の法華寺集落の形成などを考えるうえで、きわめて重要な成果といえよう。(神野)

註

- 1) 梅川光隆『平安京の器』白沙堂、2001。
- 2) 藤原良章「中世の食器・考一〈かわらけ〉ノート一」『列島の文化史5』日本エディタースクール出版部、1988。
- 3) 樹種同定は、年代学研究室大河内隆之による。
- 4) 堀部(秋山)日出雄「大和環濠集落の史的研究」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷一』1954。
- 5) 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂、1985。
- 6) 前掲註4。
- 7) 歴史研究室吉川聡による。